

LP・CD モーツァルト全集・選集に取り上げられなかった  
クラヴィーア協奏曲 へ長調 K.459 (Tp. & Timp.付き)

野口秀夫

犬輔：モーツァルトが1784.12.11付けで『全自作品目録』に記入したクラヴィーア協奏曲 へ長調 K.459 のオーケストラ伴奏<sup>注1</sup>は2ヴァイオリン、2ヴィオラ、1フルート、2オーボエ、2ファゴット、2ホルン、2クラリーニ、ティンパニ、バスとなっているのに(図1)、じっさいにはトランペットとティンパニなしの演奏ばかりなのは どうしてなんだろう。

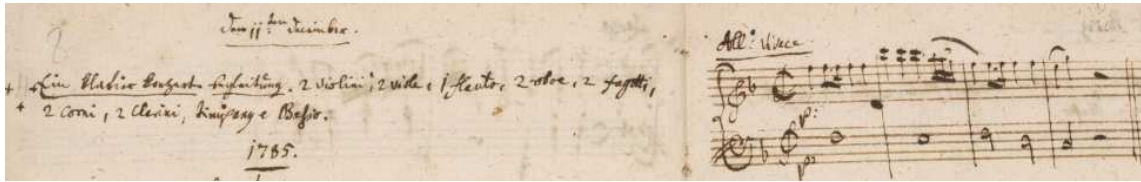


図1 全自作品目録 K.459

鳥代：自筆譜にも筆写譜にもトランペットとティンパニのパートが残っていないからなのよ。

犬輔：トランペットとティンパニのパートは別紙に書かれたけど、早いうちに紛失してしまい、今に伝わっていない<sup>注2</sup>ということなら、発見されるまで待つしかないということですね。

教授：いや、そうとも断定はできない。元々トランペットとティンパニのパートは存在せず、『全自作品目録』にモーツァルトが間違えて記入したという説もある<sup>注3</sup>。

鳥代：なぜそう考えられるのですか。

教授：交響曲を例にとると、普通トランペットとティンパニが使われるのはハ長調あるいはニ長調、そしてせいぜい変ホ長調 (K.184、K.543)、ト長調 (K.318) であり、へ長調で使われたのはただ1曲、それも緩徐楽章に限られるからなのだ。

鳥代：それはどの曲ですか。

教授：交響曲《リンツ》K.425 の第2楽章だ。その珍しさと効果についてザスローはこう語っている<sup>注4</sup>。「通常緩徐楽章では使われず、またへ長調の作品では一度も使用されたことのなかったトランペットとティンパニをこの楽章に投入することによって、モーツァルトは、さもなくば単に優雅なカンティレーナだったかもしれないものを、ほとんど黙示的な強烈さを垣間見せる楽章へと変化させた。1799年から1800年にかけて、ベートーヴェンが第1シンフォニーのアンダンテ楽章に、同じ調性、同じ手法でトランペットとティンパニを使おうと決心したとき、モーツァルトのこの楽章のもつ効果に注目したことは明らかである。[ベートーヴェンに]先んじて、ヨーゼフ・ハイドンがシンフォニーの緩徐楽章でトランペットとティンパニを使用することを試みたが<sup>注5</sup>、おそらくベートーヴェンは、そのことを知らなかった。一般的には、それはなお、古典派のシンフォニーではめったに使用されない特殊効果であり続けた」。後半はもっぱら緩徐楽章におけるトランペットとティンパニの効果についての言及だが、前半ではへ長調楽章への効果を述べている。

犬輔：一度でもへ長調楽章で使われた実績があるんだったら、K.459でも使われたかも知れないではないですか。K.425を唯一の例外として許しておいて、K.459を許さないという説には無理がありますよ。

鳥代：モーツァルトは1790年の皇帝レーオポルト2世の戴冠式祝賀期間中にフランクフルト・アム・マインでコンサートを開き、K.459とK.537を演奏したとされています。そのことからこの曲を《第2戴冠式協奏曲》と呼ぶこともあるくらいだから、トランペットとティンパニを含まない曲をモーツァルトが祝賀用に選んだとはとても考えにくいわ。

教授：90.10.15の演奏会プログラムが残っている。それによれば「第1部 [中略] フォルテピアノ用協奏曲、自作を楽長モーツァルト氏が演奏。[中略] 第2部 楽長モーツァルト氏自作の協奏曲」<sup>注6</sup>とあり、間違いなくモーツァルトの2曲のクラヴィーア協奏曲が演奏されたと解釈できる。一方、作品の同定に関してはアンドレ社から1794年に発刊されたK.459とK.537のパート譜初版のクラヴィーア・パートに「この協奏曲は、皇帝レーオポルト2世の戴冠式の折にフランクフルト・アム・マインで作曲家自身によって演奏された」<sup>注7</sup>と書かれていることが唯一のエビデンスだから、断定はできないということだ。

犬輔：戴冠式期間とは言え、単なる演奏会なんだから祝賀用の縛りがあるかどうかはさて措くとして、K.459のへ長調楽章に試しにトランペットとティンパニを挿入して演奏し、曲として成り立つかどうかを確認してはどうでしょう。成り立つようだったら、少なくともモーツァルトの『全自作品目録』が誤記であるという説は後退せざるを得なくなるでしょう。

教授：諸君たちの指摘はもっともだ。幸いトランペットとティンパニを第1楽章と第3楽章に付加して演奏してみたというCDが出たから検証することができる<sup>注8</sup>。

犬輔：CD があるということはトランペットとティンパニを挿入して曲が成立するという事ですね。あとはその効果がどれほどかということに興味は移るわけだ。

教授：異版の状況を整理しておこう。

図 1 クラヴィーア協奏曲 異版

| K   | 調性  | 年代 | オーケストラの楽器編成   | 初演情報                           | CD 等                  |
|-----|-----|----|---|--------------------------------|-----------------------|
| 459 | へ長調 | 84 | 2Vn、Va、Fl、2Ob、2Fg、<br>2Hr、Bs                        | 待降節演奏会？                        | ビルソン他多数               |
|     |     | 84 | 2Vn、Va、Fl、2Ob、2Fg、<br>2Hr、2Tp、Timp、Bs               |                                |                       |
|     |     | 90 | 2Vn、Va、Fl、2Ob、2Fg、<br>2Hr、2Tp、Timp、Bs<br>(全自作品目録準拠) | レーオポルト 2 世戴冠式時期のフランクフルト市立劇場で演奏 | シューンデアヴォルト (演奏者による新版) |

犬輔：アインシュタインは「トランペットとティンパニは、両端楽章に慎重に入れるのがよいであろう。第 1 楽章はその《軍队的な》輝きのために、無条件でそれらを必要としており、フィナーレのユーモアはそれらによって、あちこちでいっそうの効果をあげるだろう」<sup>注 9</sup>と書いているよ。

鳥代：わたし、今まで K.459 は《第 2 戴冠式協奏曲》と呼ばれる割には何か寂しい曲だと感じていたの。行進曲のリズムで始まるのだけれど、こじんまりとしていて内省的だと感じる事が多かったわ。トランペットとティンパニが加わると祝典的な華やかさが出るのでしようね。でも、へ長調の特徴はそのままにして、節度ある輝かしさで仕上がっていることを期待したいわ。



図 2 Vorstellung der Festlichen Krönung Ihre K. K. Majestät Leopoldi II. zum Römischen Kaiser zu Frankfurt den 9. October 1790 (Leopold-Wenger-Institut und MDZ/Digitale Bibliothek)

注 1: Wolfgang Amadeus Mozart: Eigenhändiges Werkverzeichnis, Faksimile des Autographs aus British Library, Sammlung Stefan Zweig MS 63, NMA X/33/1, Bärenreiter, 1990

注 2: アルフレート・アインシュタイン / 浅井真男訳『モーツァルト、その人間と作品』白水社、1961、416 頁

注 3: NMA V/15/5: Klavierkonzerte · Band 5, Notenedition (Eva Badura-Skoda / Paul Badura-Skoda, 1965) 序文および校訂報告

注 4: ニール・ザスラウ著 / 磯山 雅、若松 茂生、永田 美徳訳『モーツァルトのシンフォニー —— コンテキスト、演奏実践、受容』東京書籍 2003、191-192 頁。ニール・ザスロー、ウィリアム・カウデリー編 / 森泰彦監訳『モーツァルト全作品事典』音楽之友社 2006、260 頁に再録。但し一部原書に基づき翻訳を修正しました。

注 5: ヨーゼフ・ハイドンが緩徐楽章にトランペットとティンパニを用いたのは交響曲第 88 番 ト長調《V 字》Hob.I:88 (1787) が最初であった。但しこの緩徐楽章はニ長調である。またこの曲ではそれを一層効果的にするために第 1 楽章ではトランペットとティンパニを敢えて使っていない。

注 6: 『邦訳書簡全集』586 頁

注 7: モーツァルト全作品目録 —— 年代順主題解説 —— VII、モーツァルト研究所編、中央公論社、1978、85 頁。モーツァルト全作品目録 —— 年代順主題解説 —— IX、モーツァルト研究所編、中央公論社、1978、56 頁

注 8: Mozart: Concerto for Piano and Orchestra no.19 in F major, K.459, Arthur Schoonderwoerd & Cristofori, Accent. 名前の読み方に関し、フランスのインタビューではアルトゥール・シューンデアヴォルトと呼んでいるが、CD にはアルテュール・スホーデルヴィルト、WEB にはアーサー・スクンダーエルドと書かれている。

注 9: アインシュタイン前掲書 416 頁

(2018 年 5 月 31 日作成、2018 年 6 月 14 日改訂)